

「地域の持続可能性に貢献する農業 安心安全な地産地消をめざすために」

テーマ「農業の現状と課題 消費者に求めること」

【下関市の農業生産の概略】

平成17年の市町村合併で大きな市になり、面積は716km²になった。農地の面積は（統計上の数字）は7380haで米や野菜、果樹をつくっている。農業に携わる人（農地があって自給的にやっている人は入っていない）は2,645人となっている。農業生産額は115億円だ。これが農業に関する下関市の数字だ。

一市4町それぞれがいろいろな農業の特徴をもちながら、米も野菜も果樹、畜産、花も生産は県内でほぼ上位に達しており、県内でトップクラスの市だ。

下関市の農業生産

平成17年の市町合併で、716.17km²の
大変広い市が誕生

◆それぞれの市町の特徴ある農業が結集

◆お米、野菜、果樹、畜産、花
どれをとっても生産力は
県内上位のオールラウンダー

【各地域の特徴】（旧市町のデータが平成17年以降はないため、データは平成18年の数値）

★菊川 菊川は麦と大豆、ブロイラー（肉用鶏）の割合が大きいのが特徴だ。平地が多く区画整理をしているため大きな農業がしやすい地域。ブロイラーは大きな事業者があるため割合のデータが大きくなっている。

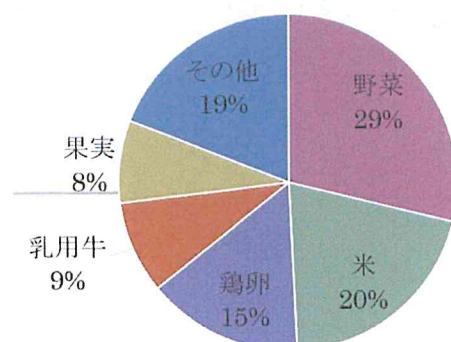
★旧下関 旧下関は野菜と花の生産割合が多い。農家一人一人が持っている農地面積が大きいので、そのなかでつくる作物として面積当たりの生産性の高い野菜などにシフトしてきた。また市場が近いということもあり換金性の高い品目をつくることができた地域だ。

花に関しては、都市近郊であるという条件もあり、とくに北浦側は温かいので早めの出荷できるという利点もある。

★豊田 大豆、梨がさかんな地域が豊田だ。大豆は県産ののんたぐろという黒大豆を早くから積極的につくってきた。他の園芸品目でイチゴなどもあるが、寒い地域であるため大豆や梨が多い。また山側なので米の生産量が多いのも特徴だ。

★豊北 畜産と梨が盛んなのは豊北だ。豊北の梨は国の国営農地開発で、山を切り開いた畑でつくっている。酪農が北海道で有名だが、豊北では涼しい山の上の方でおこなっている。200頭規模を扱う酪農家が

下関市の農業生産 農業産出額品目割合



いる。県内の酪農は大きな方だ。ニワトリの採卵鶏の農家が何軒かある。

★豊浦 豊浦は農業生産の割合が少ない。以前はタマネギや柑橘類（ミカン）などの産地だったが、今は減っている。

下関の農業産出額は115億円で、産出品目の割合は、野菜29%、米20%、鶏卵15%、乳用牛9%、果樹8%、その他19%となっている。（野菜が約3割、米が2割。残りの半分は鶏卵や乳用牛や梨など）

【農業者の状態】

合併当時（平成17年）は4,968軒 → 令和2年は2,645軒 △2,323軒減

全国の平均年齢は67・8歳 山口県は72・3歳 下関は71・5歳

この5年で農業者の高齢化が山口県は全国で一番高くなった。

経営規模 農家の半分が0・5ヘクタール～1ヘクタールの規模。なかには50ヘクタール規模の人もある。

個人経営と地域の農地を守り効率的におこなうための法人が35ある。

農業者の67%が年間100万円未満の収入。300万円未満を含めると87%になる。

※専業と兼業でやっている場合もあるため、この収入だけで見ることはできない

【米の生産費】（10ヘクタール当たり）

全国平均は10万9995円、中国地方は14万1610円、山口県は約16万円だ。

今の山口県の現状であれば、再生産ができるだけの価格が生産者の手元に入っていない現状がある。

【下関の農業の課題】

- ・農家の減少 新しく農業に入ってくる人は年間10人もいない。
- ・産地の減少 未治療農地が増加し、2015年では下関で1000ヘクタールが使われていない農地。
- ・鳥獣被害 新しい課題になっており、被害額は1億5000万円ほど。

【下関市の農業が元気になるには】

①人（担い手）の力、②技術の力、③消費の力

下関で新しく農業に参加できるように、あるいは働く受け皿として、働き手を受け入れる事業体も必要。農業就労の形も変化していく必要がある。スマート農業、ドローンなどを活用した農業のあり方も必要で、下関でも進んでいる。

消費の力は、下関産の野菜や米をぜひ食べてほしい。米の消費量が減っているため、今より一日茶碗一杯の米を食べる回数を増やせば、一人当たり年間20キログラムほどは消費量が増える。今はウクライナ危機もあって小麦も高いため、ある意味米飯を見直す契機になる可能性もある。

下関市の農業者（経営体）の状況



下関市の農業が元気になるには

- ① 人(担い手)の力
- ② 技術の力
- ③ 消費の力